

平和が続くには？

那覇市立天久小学校五年 知念 由依

テレビをつけると、また私のすんでいた与那国島のニュースがながれていた。

「有事があった場合には鹿児島へ避難することになるんだって。」

父が内容を教えてくれた。

「えっ、有事って何？」

と私が聞くと、近くの台湾で争いがあったてもすぐに島の人々が避難できるように計画していることを教えてくれた。

「それって、与那国島が戦争にまきこまれる可能性があるってこと？」

私はおどろいた。

「いや与那国だけじゃなくて、沖縄本島も危ないかもしれない。」

そう聞いて、また昔のように沖繩が戦場になるのかと思うととてもこわくなった。今のこの平和が続くためにはどうすればいいのだろうか。

それを考えるために四月、私は家族と一緒に読谷村へ向かった。まず最初に訪れたのはウンタンザミュージアムだ。沖縄戦では読谷村の海岸からアメリカ軍が上陸してきたことや、アメリカ軍のこうげきによって多くの人が犠牲になったことを学んだ。その中でも特に心に残ったのは、暗くせまいチビチリガマ内部の様子を再現したジオラマだった。アメリカ軍の上陸で追い詰められた人々が集団自決を決行したものだ。

「アメリカ兵に殺されるくらいなら、お母さんの手で殺して。」

十八才の娘は必死にお願いし、母親は娘の首を切り、自らも自決したというのだ。このガマの中では、多くの子どもを含む八十三人も人が亡くなったということだった。

「戦争ってなんてこわいんだろう。」

これまで大切に育ててきた子どもを自らの手で殺してしまうほど悲しいことがおこってしまう。これが私とお母さんだったらどうだったんだろう。そう考えるとこの事実は信じられないし信じたくない気持ちになった。暗いガマの中でアメリカ軍がせまってきたのを知り、周りの人が自決していく。もう生きる希望さえ失ってしまった人々。今の私達のように平和にくらしていたのに他国のこうげきにあってしまった。このジオラマの前で、考えれば考え程、どうしようもない悲しい気持ちになった。こんな戦争がくり返されないはずがない。

その後、私たちはチビチリガマへ実際に行ってみるようになった。急な階段を一步一步おりにゆくと暗い空間が広がっていく。おくにガマの入り口がみえた。その入り口に立つと、さっき見たジオラマの親子が思い出された。この暗やみで追われた多くの人が集団自決で命を落としたり。もうもどることもない命。とても悲しかった。ガマのとなりで建てられたおはかに手を合わせていのちだ。

「みなさんが、戦争で傷つき、どれだけ苦しむ、こわい思いをしたのか、それを考えるたびに悲しい気持ちになりました。このようなことがおこる戦争をもう二度とくりかえさないとちかいます。」

帰り道によった読谷の海岸。空は青く、きれいな海がどこまでも広がっていた。これが平和なのだ。そこに建てられた歌ひを読んだ。

恨んでいん 悔やでいん あきじゃらん 子孫末代 遺言さな（恨んでも、悔やんでもまだ足りない。子孫末代に遺言しよう。）

私は戦争を体験した人達の恨みや悔しい気持ち、「もう戦争をしてはいけな」という心からの叫びを感じることができた。

どうしたら平和が続くのだろう。私は沖縄でおこった戦争について知り、学ぶことが大切だと思う。戦争があった島にすむ私達だからこそ身近に戦争の悲しさを感じ、平和でありたいと考える。今ならまだ間にあうのだ。先人達の声を聞き、沖縄から世界へ平和を広げていきたい。